

テクノロジー企業 APAC ランキングで 日本企業がトップ 10 に

デロイト トウシュ トーマツ (DTT) は昨年12月、アジア太平洋地域 (APAC) の TMT 業界 (Technology, Media, Telecommunications) における過去3年間の収益 (売上高) 成長率からなる成長企業500社ランキング、第6回「デロイトアジア太平洋地域テクノロジー Fast500」を発表した。

首位は、主に太陽光発電システムを構築している中国の Trina Solar 社で、売上高成長率 2万7542%。

2位は1万2381%で、台湾で液晶TVのディスプレイ電力供給などを行う Logah Technology 社、3位は1万237%で、オーストラリアのモバイルコミュニケーション企業、Mobile Data Group Pty 社が受賞している。

日本企業からトップ10入りを果たしたのは、光ネットワーク用光部品の開発、製造及び販売を行っているファイベスト。6512%の成長を遂げ、6位。日本企業としては2年ぶりのトップ10入りを果たした (図1)。

激増する 10G 市場を反映

このようなランキングに登場するのは、一般的にはソフトウェア、インターネット関連の企業が大部分で、ファイベストのような設計、製造、販売をメインビジネスとするハードウェア分野の企業は稀だ。2004~2006年の売上で6500%を越える成長は、光デバイスメーカーとしては異例中の異例。光通信市場は、ここ数年拡大基調にあり、このトレンドに乗っている企業は利益を出せるようになってきていると言われているが、それでも10%の成長さえ難



図1 授賞式の風景。ファイベストは、過去3年間の成長率6512%を達成し、APACで6位、日本では1位にランクされた。中央がファイベストCEO、前田稔氏。光通信半導体デバイスメーカーが、これほどの成長率を達成したのは異例のこと。

しい。ファイベストのCEO、前田稔氏は今回のトップ10のランキングに関連して、「10Gbpsのハイエンドにフォーカスしていること、よい顧客を持っていること、当たり前のことを当たり前でやってきたことの成果だ」とコメントしている。

ファイベストは、2002年に設立し、今回の受賞は2004年~2006年までの決算に対する評価に基づいている。連続してトップ10に入ることは、一般には難しいと見られているが、前田氏はその可能性も否定しない。

ファイベストが得意とするのは、IC内蔵のTOSA、ROSA。これらの製品を世界のモジュールベンダに供給している。10Gbpsでも40km、80kmの伝送距離をカバーする製品は、配線デザインの違いが性能に反映され、部品の違いが歩留まりに影響すると言われるほど、設計、製造に緻密さを要求する世界。したがって、この分野のプレイヤーは極めて少ない。

「ハイエンド製品は、設計、作り方も難しい。機械で簡単にできるものでは

ない。ファイベストの製品は、IC内蔵のTOSA、ROSAなので自動化は難しい。今後、しばらくは日本周辺の国々のキャッチアップも難しいと捉えている。」

ファイベストの製品は、メトロリングやWDM伝送に使用される10Gbpsのトランシーバに用いられている。メトロ、ロングホールの市場急拡大を受けて同社のビジネスは、2007年決算までの評価でも800%程度の成長は見込めると前田氏は予測している。

次は上と横への展開

10Gbpsハイエンド製品にフォーカスしているファイベストの今後の製品展開は、40Gbps、100Gbpsへの展開とチューナブル製品の市場投入ということになる。前田氏によると、「40Gbpsと100Gbpsでは、どちらが先か、どちらがメジャーになるか、まだわからない」という。ファイベストとしては、戦略を練っている段階だ。

10Gbpsチューナブル製品は、量産サプライヤが極めて少ないのが市場の現状。「今年は、チューナブル製品を出したい。使えるチップを比較して、アイデアを出している段階。WDMの波長の2倍くらいの値段なので、方式から考えて行かなくてはならない。」

「値段が本当に安くてよいものができれば、増える」と前田氏は見ている。

企業の規模が大きくなると、自ずと成長率が落ちることになるが、それでも3年間で150%前後の成長は「当たり前前を当たり前でやっていけば達成できる」というのが前田氏の考え方のようだ。

LPWJ